

環境問題における人間中心主義・自然の支配・技術のあり方

ー グルントマン『マルクス主義とエコロジー』を読む

Anthropocentrism, Domination of Nature, and Technology in Environmental Problems: A Commentary on: R. Grundmann, Marxism and Ecology

島崎 隆（『環境思想・教育研究』第2号、2008年）

一 人間中心主義と自然中心主義の論争とそれへの批判

従来、環境倫理において、人間中心主義と自然中心主義の争いがしばしばおこなわれてきている。そのさい、辞書的には、人間中心主義は、「人間の視点からものごとを見る」、あるいは「世界の中心に人間をおく」見方を意味する。それは、かならずしも、人間の尊厳を重視するような「ヒューマニズム」（しばしば「人道主義」と訳される）とは、関連があるとしても、意味がまったく同じではない。他方、「自然中心主義」は、人間よりも自然を中心にみる見方で、「生命中心主義」や「生態系中心主義」を含む*1。

この両者はまったく対立的であり、いまだはいずれの立場を採用するにしても、極端な人間中心主義も自然中心主義も成り立たず、それぞれ温和なかたちでの立場しか成立可能でないことも明らかになっていると思われる。さらにまた、最近では、こうした抽象的なレベルでの環境倫理の議論が、焦眉の環境問題の解決にどのように役立つのかということが指摘されてきた。たとえば、岡本裕一郎は『意義あり、生命・環境倫理学』というポレミックな著作で、説教調の抽象論に成り果てている環境倫理学が現実問題にたいして使い物にならず、同書の意図が、こうした環境倫理の「終わり」を確認することにあるという*2。いうでもなく、抽象的・原理的な環境倫理のみで、環境問題の哲学的・原理的基礎づけができるということはありません。最近私は、この「エコフィロソフィー」の分野で四つの基本課題を提起した*3。環境倫理は単にそのなかのひとつにすぎない。とくに、環境の破壊・汚染にたいする経済学的分析を含む社会認識・社会批判の視点がなければ、エコフィロソフィーは有効に働かないだろう。さらにまた、「環境プラグマティズム」という立場も現れて、同様に抽象的で非実践的とされる環境倫理のあり方を批判してきた*4。

ところで結局、岡本は、「人間中心主義でどこが悪い」と述べて、この立場を主張する。だが、この立場が自明なものとして正しいとならない以上、議論が蒸し返され、やはり依然として、人間中心主義か自然中心主義かという原理的問題は継続することとなる。私は、この議論の抽象性に注意しつつも、以下において、人間中心主義を明快に唱えるライナー・

グルントマン (Reiner Grundmann) の主張を、おもに彼の『マルクス主義とエコロジー』*5に即して検討したい。そのさいより具体的に、人間中心主義のアイデアを自然の支配や技術の問題と関連させて論じたい。本書はまだ翻訳がないというせいもあって、十分な全体的検討はなされていないし、彼の人間中心主義の強固な論陣およびマルクス理解は、おおいに興味深いものと思われる。こうした検討は、エコフィロソフィーにとって有益な論点を付加するものと期待されるだろう。

二 グルントマンの基本的立場

まず本書『マルクス主義とエコロジー』*5の主張を概略的に紹介したい。

本書においては(おもに第一章)、方法論的に、ハーバマス、ルーマン、マトウラーナらのシステム論やオートポイエシス論を含め、分析的マルクス主義(コーヘン、エルスターら)、ゲームの理論らが積極的に活用されるが、反面、弁証法的方法にはきわめて懐疑的である。「パラドキシカルな傾向」(p.228)と表現するときですら、「弁証法的」とはいわれないのである。グルントマンは弁証法を何か直線的な因果関係を認識するものと誤解し、それを捨て去る。こうした方法論的態度は、現実認識に新鮮な局面を切り開くとともに、マルクスが依拠した弁証法をつねに捨象するので、マルクスを内在的に理解したい私としては、いつも肩透かしを食らうこととなる。

さらに、グルントマンは、「人間中心主義 (anthropocentrism) および自然の支配 (mastery over nature) がエコロジー的問題をけっして発生させたわけではなく、それはむしろ、この問題を論ずるための出発点なのである」(p.2)として、この「人間中心主義」および「自然の支配」を、積極的に、みずからの議論の大前提に据える。彼によれば、「一九世紀の共通の世界観」— 科学的知識の増大、技術的發展、経済活動など、一言でいえば産業主義 (industrialism) — は、それが現実に人間の目的に役立ったのであるから、本来積極的なことがらである。さらに同様に、自然の道具的理解、機械論的世界観、主客二元論などが環境問題の根本にあるという主張にたいして、「本書の基本的推進力は、こうした要求を直接に反駁することである。私見では、『自然の支配』〔という立場〕はエコロジー問題に責任はない」(p.15)と断言する。こうして、あからさまに「自然の支配」「人間中心主義」という、通例まさに、近代主義やマルクス(主義)に向けて各種エコロジーが執拗に批判するこれらの考えを、逆に積極的に擁護しようとする。現代のエコロジー的常識からすればこれは驚くべきことであり、一体どうしてこうした弁護が可能な

のかという疑念が湧くであろう。小論では、この理由にも焦点を当てたい。

このように人間中心主義に立つグルントマンは、本書第二章などでマルクスや自分の自然観を展開するが、そこにはあまり力点はなく、むしろ社会科学的事実ながらに、つまり経済学的な問題、技術や史的唯物論のあり方に強く注目する。とくに彼は第三章において、マルクスがなぜこれほどに技術に取りつかれたのかと発問して、自分自身、執拗に技術に注目する。というのも、彼が人間中心主義に立つからこそ、人間の自然にたいする管理や制御に力点を置くのであり、そうした自然への働きかけは、道具や機械に結果する、まさに技術の問題となるからだ。環境問題も、おもにその技術の不十分性から検討される (pp. 28ff.)。彼によれば、技術由来の環境問題は、①酸性雨、食物連鎖における有害物質の蓄積など、技術の常態的働き、②スリーマイル島、チェルノブイリ、ボパール事故など、突発的なできごと、の二つに由来する。後者に関しては、原子力技術がその典型だが、石油化学施設、造船、空輸、ダム、鉱山、各種の兵器、遺伝子技術など、高度のハイリスク・テクノロジーが環境問題への脅威となる。「簡単に考察すればわかることだが、技術がことがらの中心にある。素朴な技術しかもたない初期の人類は、今日の人類と同じ仕方で環境に影響を与えることはできない。」 (p. 29)

いうまでもなく、グルントマンは、これらの環境問題には、技術の資本主義的形態に責任があり、ここから脱するところに社会主義・共産主義があるという。この点で、彼は資本主義を批判する。一般的にいつて、資本主義では、利潤追求にもとづく「生産力の増大」が目指されるが、それが自然への制御の増大へと結びつかず、生産過程における不安定さ、危険性、制御不能へと結果する (p. 4)。そこにおけるエコロジー問題の原因として、①企業ができるだけコストを外部化するという、いわゆる自然の「外部化」の問題、②企業が環境問題を引き起こす長期の因果関係を軽視するという問題、を挙げる (p. 27)。以上の批判はまさに妥当なものであろう。これにたいし、マルクスの立場は「生産力主義 (productivism) の擁護であり、かつ資本主義の拒否である」 (p. 3) という。社会主義がそれほどうまく技術による環境破壊から脱せられるのかという問題はさておき、技術重視の環境問題へのとらえ方を詳細に描くところに、彼のひとつのメリットもある。

さらにグルントマンは、第四章で史的唯物論をおもに技術論の立場から再構成し、マルクスのなかに社会決定論と技術決定論の二つの視点が存在するという (p. 200)。最後の第五章では、マルクスの共産主義概念を理論的に検討し、混合経済、市場社会主義が実行可能な社会であると結論する (p. 270)。マルクスの共産主義は透明で知的な社会である

が、現実社会はますます不透明になり、社会科学考察がさらに必要となる。この点で、マルクスはやはり楽天的であったとされる (p. 281)。

以上で、最低限であるが、グルントマンの基本的立場が了解されたといえよう。

私は以下で、とくに以上の議論のなかから、自然の支配および人間中心主義の問題と、技術および史的唯物論の認識について紹介・検討したい。

三 人間中心主義の主張と自然の支配の問題

人間中心主義はたしかに、環境問題にたいする一面の真実を衝いている。ある意味で、われわれ人間は人間中心主義を脱することはできず、生産や文化活動など、人間が独自におこなう立場からしか自然を眺めることはできないからである。だがそこには、同様に別の視点から成立可能な自然中心主義の視点がまったく考慮に入れられていない。ある意味で、人間は自然進化の産物であり、自然を必要とする自然存在であるからこそ、自然に技術と労働によって働きかけなければならない*6。だが、こうした徹底した主張を掲げるグルントマンは、かつて自然中心主義に近いテッド・ベントンを批判し、彼と論争をおこなった*7。

だがそうならば、なぜグルントマンは、これほどまでに人間中心主義と自然の支配を提唱するのだろうか。以下、このことを中心に検討しよう。

まず、グルントマンが自然の「支配」というときの用語のありかたを検討する。「支配」に対応することばは、“domination”および“mastery”である。小論第二節の引用のほかにも、たとえば、彼は「自然の支配 domination of nature」(p. 52)ともいう。彼においてはこの二つのことばは、ほぼ同義に使われているようである。だが、日本語的な語感からすると、後者(mastery)には「支配」のほかにも、「制御」「熟達」という意味がある。自然の「支配」というと、環境問題に敏感な現代からすると、日本語的に悪い意味が強くなっているが、「制御」「熟達」というと、悪い意味は感じられない。実際彼は、道具や楽器を「マスターする」、それに「熟達する」という意味で、masteryを使う。道具をマスターするという例を出したのちに、彼は、「われわれが自然の支配(domination of nature)ということを理解しなければならないのは、この意味においてである」(p. 61)と強調する。したがって、ここでも、domination=masteryであり、「支配」という表現は、きわめて広義に、柔軟に「制御」などの意味も含めて使われていると見ていい*8。

もちろん、グルントマンは、相手を一方的に抑圧し服従させるという意味での「支配」

については、意志のない自然には、ありえないと考える (p. 61)。だからあくまでも、自然の法則を認識し、応用するという意味での「支配」が、彼において大前提となっている。したがってそこに、まさに科学・技術の適用が必要となるのである。ところで、「したがって共産主義は、自然の支配 (mastery over nature) の過程の頂点である」 (pp. 92f.) といわれるように、疎外のないはずの共産主義で積極的に「自然の支配」が使われるかと思えば、「こうして、自然の支配 (domination of nature) というベーコン的なヴィジョンは、廃棄されるのではなくて、完成されるべきだ」 (p. 26) とも指摘される。すなわち、グルントマンはこの両者、マルクスとベーコンの自然観に区別を置かず、ともかく自然へのより十分な支配、制御を旨とすることに力点を置く。つまり、この両者に連続面のみを見て、質的飛躍の関係を無視しているようである。

以上のように、「支配」にもとづくグルントマンの技術観は、たしかに人間の制御を万能と見る人間中心主義的な見方であり、その完成が共産主義なのである。だからそこに、技術の資本主義的形態の批判がいわれるとしても、ベーコン、デカルトを含め、近代資本主義の技術や自然に含まれる考え方への徹底した批判は見られない。さらにまた、環境破壊を引き起こさない具体的な技術のあり方の模索もない。彼はまた、マルクスの exploitation という用語を出しても、そこに、「開発」「利用」と「搾取」という両義があることも見抜けない (p. 60)。というのも、マルクス主義においては、自然にたいする労働と技術による「開発」「利用」は是認されるが、資本主義で常態となっている、自然への「搾取」は廃絶されると想定されるからである。それとつながって、マルクスのいう人間と自然の間の「物質代謝 Stoffwechsel」を引き合いに出しながらも、彼はその技術的・主体的側面を重視しながらも、物質循環の客観的側面 (自然中心主義につながる) を把握しそこなう (p. 240)。私が、小論第二節で、彼がマルクスに詳細に言及しても「肩透かし」を食らうと表現したのは、このことである*9。彼は分析に必要なマルクスの命題をほとんどすべて引用するが、その解釈の結果がかなりの程度、期待外れに終わることが多いといえよう。

この意味で、グルントマンの「支配」概念を詳細に検討した韓立新が、結論的に、「唯物論の原理には、自然が完全に人間によって制御されえないということが含まれている」として、「マルクスの自然主義のもつ意義」を強調したことは、正当である*10。以上で、グルントマンの人間中心主義と「自然の支配」が密接につながり、これが技術重視を引き起こしたということが明らかになったと思われる。

四 自然中心主義的言語表現の奇妙さ

だがそれでも、もうひとつ議論しなければならない点があると思われる。それはグルントマンの自然観の独自性に関わる。この点を問題としなければ、彼は納得しないだろう。そしてそこに、彼の重要な言い分もある。

グルントマンは自分の主張と関わって、「人間中心主義的なアプローチは、そこから環境問題が評価されるべき参照点を提供するという主要な長所をもつ」(p. 20)として、自然中心主義である「『エコロジー中心的な』アプローチ」を徹底して批判する。というのも、「エコロジー問題は基本的に、人間による自然の破壊の結果である」(p. 20)からである。この箇所では、緻密な分析的議論を展開する。このスタンスは、たしかに社会批判を問題とするエコマルクス主義や社会エコロジーが重視するところであろう。

だが続けて、グルントマンは、上記の命題「エコロジー問題は基本的に、人間による自然の破壊の結果である」を再解釈する。彼によれば、自然が人間によって「破壊される」というのは、厳密には誤った言語表現である。また、「自然が破局に陥る」ということも実はありえない。人間なしの自然に、「破局」という表現は存在しえないからだ。要は、人間が住む環境が、人間にとって不都合になったというだけのことである。大地震によって、自然界が荒涼たる風景になったとしても、それは自然自身にとってはどうということもないだろう。こうして、「ここでの重要なポイントは、われわれが社会によって生み出されるエコロジー問題に明白に関心をもつということであり、その解決が社会行動の展望のなかにあるようなエコロジー問題に明白に関心をもつということである」(p. 23)。この点で、「『エコロジー中心的な』アプローチ」、すなわち自然中心主義は、決定的に誤っている。環境問題はあくまでも人間が住んでいる社会が発生源となっている問題であって、エコロジカルな調和もまさに人間の必要から問題とされる。

彼の意図をもう少し明らかにしよう。しばしば環境問題との関連で、さらに「地球が病んでいる」などともいわれる。だが、彼によれば、何が自然にとってノーマルなのかはいうことがむずかしい。というのは、自然はいつも「自分と均衡している」(p. 23)はずである。水質汚染で魚が川に住めなくなったとしても、その代わりに藻が繁茂する。ただそれだけのことである。急速な変化で、生命現象を含め、そこに別の自然法則が働いただけである。自然自身は何も破壊ないし汚染などされていない。また、自然は内部に目的などもたないから、それ自身として自然が歪むということもありえない*11。さらにいえば、

「技術が民主主義的であるか、権威主義的であるかという区別は、人間に関わることであって、自然には関わりないことである」(p.18)。意志のない自然にたいして、ソフトな技術であろうがなかろうが、「人間による自然の支配」を確実に貫徹することが重要である。「それが操作であれ、支配、利用、そそのかしであれ、自然を利用するその事実そのものが、いわば環境問題の決定的要点ないし『原因』になるというわけではない。」(p.23)だから問題は、結局、人間にとって不都合な環境の変化でしかない。まさにこうした議論が、強力に彼の人間中心主義を支えている。

以上の論陣は強力かつ徹底的なものであり、自然中心主義擁護からの反駁はなかなかむずかしいように見える。グルントマンは、ある意味で、安易な自然中心主義的発想やその言語表現を徹底して打破したといってもいいのではないか。このままだと、彼の人間中心主義がそのまま正しいように見える。「地球(自然)が破壊される、病んでいる」といっても、それは自然自身には実は関係はなく、あくまでも人間側からの見方でしかない…。

五 グルントマンの自然イメージ

ところで、この批判を一般に承認するとしても、彼のいう「自然」とは、そもそもどういうイメージをもっているのか、このことを検討することが問題解決のためにさらに必要だと思われる。たとえば、彼の自然観は、機械的なイメージにもとづくのか、それとも生命的なイメージにもとづいているのかと発問できる。前者はデカルト主義的な機械論的自然観であり、後者はロマン主義的自然観や生態系的自然観に見られる。後者では、そこに大地、空気、水などの無機物物質が存在しているとしても、そこではあくまでも無数の生命が住まう「地球生命圏」などが表象されるだろう。そのように考えた場合、彼の自然観は一面的といえよう。否、豊かな自然観を展開する必要性を、彼は感じなかったのだろう。そして彼の自然観は、おおむね機械論的・道具主義的であるといえよう。彼は、「私は自然の道具主義的見解を拡張することを提起する」(p.57)とすら宣言するのだ。そこにあるのは、一方的に労働と技術の対象と見られた自然である。

以上の一面的自然観がどういう問題をもたらすのか、彼の議論の綻びを探そう。彼は厳密な意味の「支配」では、意志のあるものだけが対象だと述べつつ、さらに、野生の生物を手なづける(taming of wild animals)という事例を出す(p.61)。この点に手がかりを見いだしたい。たしかに、野生であれ、ペットであれ、高等動物ならば、その自然物を虐待したり、暴力的に支配したりすることが可能ではないだろうか。そこには、動物の生

命と生活の権利を保証しつつ、その自然と向き合うのか、それとも自然法則を利用するとしつつも、それを人間目的に端的に従属するものと扱うかでは、そこに見られる自然観はおのずと異なる。こうして、前者はいわばエコロジカルな自然観であり、後者は近代資本主義の人間中心主義的な自然観といえよう。

ところで、環境汚染で自然環境が悪化したさいに、大小の多くの生命が人類によって抹殺されたことは事実である。なるほど、そこでは別の自然法則が働き、別種の生命が活動するかもしれない。すでに述べたように、そこにおける無機的自然が「破壊される」ということはありえないかもしれないが、従来も現在も、多くの生命が人類によって破壊された（ている）ことは事実である。それが自然的原因で生じたとすれば、それは人類に責任はないが、人為的起源で大量の生命絶滅が発生したとすれば、それら生命体の多くは苦痛を感じながら死んでいくのであり、それにたいし人類は道徳的責任を取る必要があるのではないか。ところが、彼には生態系的自然観という発想もなく、動物の権利も議論されず、労働を人間的自然と外的自然の間の客観的循環としての「物質代謝」と見る観点もなかった。「人間も自然の一部である」というマルクスの命題は引用されるとしても（p. 240）、長い進化の過程で、無数の生命の協力過程のなかではじめて人類自身が産出されたという進化論的自然認識も欠如している。彼の議論は、マルクスそれ自身の労働観、技術観、自然観の全部を包括しては、その人間中心主義的な側面のみ注目している。

その点で、マルクスが「土地所有についてのマルクスの二つの演説の記録」（一八六九年）のなかで述べていることは、実に示唆的である。土地国有化をめぐる議論のなかで、彼は、「自然権についていえば、動物も土地にたいする自然権をもっている。土地なしには、それは生きていけないからである」*12と述べる。彼は動物にたいして、「社会的必要」の理由から土地の利用を承認するのである。こうして、動物は人間にとって、単に手段的存在とみなされるだけでなく、それは何らかの生命主体とみなされる。さらにいえば、マルクスは、土地を含め、地球という存在にたいして、全人類が所有者（Eigentümer）になることを否定し、人類は単にその占有者（Besitzer）ないし用益権者（Nutznießer）になるだけだと述べる*13。こうした興味深い発想は、マルクスが単純に人間中心主義に立っていないことの現れといえるだろう。

しばしば指摘される、エンゲルス由来の「自然の復讐」*14の議論も、グルントマンはそれを引用しているとしても（p. 58）、その意義を十分につかめていない。詳細に展開できないが、たびたびの自然利用は、最後には人間の予測を超えた環境破壊を引き起こすと

というのが、エンゲルスの「自然の復讐」の含意であった。いわばこれは、人間中心主義にたいするエンゲルスの警告であった。実はグルントマンの関心も、いままで示されたように、高度化された技術による「予期せぬ帰結のメカニズム」(p. 78)にあったはずである。また既存社会主義における環境問題の考察が十分になされていないせいか、彼の人間中心主義には、豊かな自然観を前提に技術をいかに社会内部で構築するべきか、というさらなる展開は見られない。ここに彼の人間中心主義の限界が見られるだろう。

六 技術と史的唯物論

なぜグルントマンがこれほどに技術を重視するかは、一部マルクス自身の史的唯物論の見解から由来する。彼はそこに二つの要因を見る(p. 109)。

- (1) マルクスは技術を人間の一部とみなした。技術とは、それによって人間が物質ないし自然を支配し規制できる手段とみなされた。
- (2) 生産様式の発展をみざす生産力の重要性との関連で、技術は結局、社会発展の推進力である。

以上は、おおむね妥当な見解といえよう。こうした技術重視は、ある意味で、たしかに環境問題に重要な論点を付加することにまちがいはない。以下、グルントマンは「社会形態と技術形態の共進化のあり方」(p. 200)をマルクス史的唯物論のなかに探り、以下のような図式を取り出す。

生産様式	古代	封建主義	資本主義	共産主義
主要な技術	道具	道具、マニユ ファクチュア	マニユファ チュア、機械	？
生産の形態	使用価値	使用価値、 交換価値	交換価値	使用価値
生産の目的	必要のための生産	同左	剰余価値の ための生産	必要のための生 産
社会化の 形態	盲目的に規制され 社会生産	政治的規制、ギ ルドと国家、部 分的に市場	独立生産、 市場の規制	意識的計画に規 制された社会的 生産
人間関係	人格的依存	同左	物象化、自由 な個人	自由な個人の アソシエーション
人間— 自然関係	根源的統一	同左	分離	再統一

「新たな生産力を獲得することによって、人間は自分たちの生産様式を変える。〔中略〕ハンドミルは封建領主の社会を与え、蒸気式のミルは産業資本家の社会を与える」*15という主張など、マルクスは技術と経済的社会構成体とがほぼ一定の対応関係を形成するとみなしている面がたしかに存在する。そこから、以上のように、史的唯物論のある発展図式が作成される (p. 212)。この図式自体はわかりやすく興味深い。そこでは、古代には、「技術」としては単純な道具が、封建主義には道具とマニユファクチュアが、資本主義にはマニユファクチュアと機械が、それぞれ対応するとマルクスは見たことを含め、さらに以下のことがらが指摘される*16。「生産の形態」からすると、資本主義以前は使用価値が、資本主義では交換価値が、共産主義では再度、使用価値が目指されるはずである。「生

産の目的」からは、資本主義以前は必要のための生産が、資本主義では剰余価値の生産が、共産主義では再度、使用価値のための生産が目指される。「社会化の形態」としては、古代では盲目的法則に規制された生産が、封建主義では政治的規制、ギルドと国家、部分的に市場が存在し、資本主義では独立的生産と市場による規制が、共産主義では意識的に規制された社会的生産が支配する…。

以上、グルントマン自身は、「生産様式」に「主要な技術」「生産形態」「生産目的」「社会科の形態」という四つの指標を対応させて史的唯物論の展開を示したが、これはわかりやすく有益な整理であろう。旧ソ連・東欧の社会主義の崩壊後、こうした史的唯物論の図式が現時点でどの程度有効性をもっているのかは改めて問われなければならないだろうが、歴史的展望を切り開くという意味では、いまでもこの図式は有意味ではないだろうか。こうした指標はさらにいくつか付加することができようが、自然環境問題との関連で、さらに私は、あえて「人間関係」「人間－自然関係」という指標をここで付加しておきたい。この点では、マルクスによれば、資本主義以前（前近代）では、人間と自然の間には「根源的統一 *ursprüngliche Einheit*」の関係があったが、本源的蓄積過程によって、資本主義では、この関係が分離してしまい、人間が自然から疎外されてしまった。将来の共産主義では、経済的、政治的な場における諸個人のアソシエーション（連合）の構想とともに、人間－自然関係の「根源的統一」が何らかのかたちで回復されることになるだろう（このことが具体的にどういうかたちで実現されるかは、さらなる課題であるけれども）。この再統一の構想はマルクス『賃金、価格、利潤』に明確に見られる*17。

ところで以上の図式で問題となるのは、共産主義と技術形態との関連である。この社会形態では、資本主義と同様に機械制大工業が規定的であるのか、それとも何か別の技術形態が対応するのか。グルントマンはマルクスはこの点で未決定であるという。だが彼によれば、マルクス主義的には、共産主義にふさわしい技術が決定されなければならないとされる。もし共産主義をユートピアとしてではなく、実現可能な将来的社会形態として構想するならば、彼の問題提起は重要であろう。そしてその技術形態は、人間を搾取することに奉仕するものではないのは当然として、さらに自然環境の破壊・汚染をできるだけ防止するような性質のエコロジー的技術でなければならないはずである。

グルントマンはこの問題を、残念ながら積極的に展開していない。小論第二節で示したように、彼自身は、資本主義社会で発生した、大規模でハイリスクの技術による環境破壊の危険性を力説したはずである。共産主義に対応するはずの技術形態の提起は彼自身の

新たな課題であるとともに、自然環境問題全体への普遍的課題でもある。哲学的に言えば、ともかくも、単なる人間中心主義に依拠するのではなくて、豊かな自然観や人間－自然関係を包括する立場、すなわち人間中心主義と自然中心主義をともに統一する立場が必要となる。従来の研究や拙著『エコマルクス主義』が明示したように、マルクス自身はつねにこのような統一的立場に依拠していたことが、いまや明らかになっているといえよう。

* 1以上、尾関・亀山・武田編『環境思想キーワード』（青木書店、2005年）所収の「自然中心主義と人間中心主義」（高田純執筆）の項目を参照。

* 2岡本裕一郎『意義あり、生命・環境倫理学』ナカニシヤ出版、2007年、ii頁、279頁など参照。

* 3この点では、拙論「『エコフィロソフィー』の基本課題をめぐって」『一橋社会科学』第四号、2008年を参照。「エコフィロソフィー」とは、エコロジー、環境倫理、環境哲学、環境思想などといわれる分野を総称するものである。なおその四分野とは、①自然哲学と自然科学の自然認識ないし自然観、②多様な問題を扱う環境倫理、③環境問題の社会認識・社会批判、④エコロジカルなライフスタイルの主体的形成、である。これらの問題群を総合的に考察することによってのみ、環境問題への有効な哲学的・原理的把握が可能となるといえよう。

* 4白水土郎「環境プラグマティズムと新たな環境倫理学の使命」越智貢・他編『岩波・応用倫理学講義』2（環境）、岩波書店、2004年など参照。

* 5Reiner Grundmann, Marxism and Ecology, Oxford, 1991: Clarendon Press. 以下、本文中に、本書の頁数のみを挿入する。グルントマンはドイツ人のようであるが、フィレンツェのヨーロッパ大学研究所の연구원などを勤めると表紙の裏に紹介されている。本書がドイツ語でも出版されたかどうかは不明である。

* 6マルクスはこのことを十分に明らかにした。そこには、実質的につねに、人間中心主義と自然中心主義の弁証法的統一の立場が存在する。私は拙著『エコマルクス主義』（知泉書館、2007年）でこの問題を執拗に追求した。詳細に展開できないが、たとえば同書、第二部のテーマ「自然は人間の非有機的身体である」は、まさに人間中心主義と自然中心主義の統一の具体的あり方を論じている。おそらく、マルクスを緻密に読解することがグルントマンへの有効な批判となることだろう。

* 7 "New Left Review"誌でおこなわれたこの論争の紹介・検討については、岩佐茂『環境の思想』創風社、1994年、145頁以下参照。

* 8韓立新はグルントマンらにそって、この訳語の問題を詳細に論じており、参考になる。韓立新『エ

コロジエとマルクス』時潮社、2001年、23頁以下、106 頁以下を参照。

*9 exploitation については、前掲拙著『エコマルクス主義』、25頁、152 頁、さらに Stoffwechsel については、同書、第三章「マルクス唯物論における物質代謝概念」を参照。

*10韓、前掲書、121 頁。

*11グルントマンの以上の論法は、さきのベントンの論争でも、そのまま使われている。岩佐、前掲書、149 頁以下参照。

*12MEW16, 558f. 『マルクス・エンゲルス全集』第16巻、大月書店、557 頁。

*13MEW25, 784. 前掲全集、第5 巻、995 頁参照。

*14MEGAI-26, 550f. 秋間実・渋谷一夫訳『新メガ版・自然の弁証法』新日本出版社、1997年、117 頁参照。

*15MEW4, 139. 高木佑一郎訳『哲学の貧困』国民文庫、151 頁以下。

*16なお、マルクスは『資本論』では、マニュファクチュア（的分業）の存在を16世紀中葉から18世紀最後の1 /3 までの時期と見ている。MEW23, 356. マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論』①、441 頁参照。

*17MEW16, 131. 横山正彦訳『賃金、価格、利潤』国民文庫、53頁参照。